

大学初年次教育における 「レポート作成のための読書教育」の試み —計量テキスト分析による「学習者の気づき」の検討— 牧 恵 子

目次

- 1 不読による困難から考える（はじめに）
- 2 大学初年次生向け「入門書を俯瞰する読みの技術」をプログラム化する
- 3 「学習者の気づき」に関する計量テキスト分析
- 4 計量テキスト分析からの考察（まとめと今後の課題）

1 不読による困難から考える

本稿は、大学初年次教育の「レポート作成のための読書教育」を実験的にプログラム化し、実践後の学習者からの気づきをもとに計量テキスト分析した結果、その「読書教育」を取り入れる有効性を報告するものである。

本課題を取り上げる背景には、大学初年次教育を担当する実践者にきこえる、つぎの2点の問題がある。第1は、大学1年生が小説などは少し読んできても、「新書」読書の経験がほとんどないことである。第2は、大学初年次教育の中心的課題が「批判的で、論理的なレポートの作成」であることに対して、学生から「何を書いたらよいのか、分からない」という質問を多く受けることである。

これらの問題に関して、日本語学の石黒圭から示唆的な言葉を受け取ることができる。初年次教育のライティングに関して、日本語教育の立場で「自ら読みながら模倣する能力が高い」、「どうしたら読めるか」というと、書かせるために読ませるとするのが一番早道」（東谷護，2019）である。

さらに、大学2年生以上からは、「集中して読むことができない」、「目的のない読書はしたくない」、「読むことが独りだけの活動になっているので次第に読まなくなる」など困惑の声が聞こえる。

こうした状況を受けて、筆者は、2013年度から大学初年次生に向けて、「レポート作成のための読書教育」として入門書を読む技術を取り込んだ授業プログラムを考案し、実験的に実践してきた。（牧，2017）

2 大学初年次生向け「入門書を俯瞰する読みの技術」をプログラム化する

2.1 「読みのハードル」を下げる (readiness for reading)

現代の大学初年次生への読みの教育のスタートは、「専門書や論文などの学術書を読む」前の段階を設けないと進まないという状況である。筆者はその時期を「準備読書」段階と名づけ、大学生への読書教育と捉えている。この「準備読書」は、複数冊の新書に目をやり、知の世界の広さを感じつつ、「読むための視点の獲得」と「知識や情報そのものに出会うこと」を習慣づける時期である。将来、専門書を読んでいくまでの読みの構えを習慣づけていく。高校生や大学生の不読者が5割前後という実態(全国学校図書館協議会, 2019)、(東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策センター CRUMP, 2018)を受けて、不読者層への読みのハードルを下ろすことから始めていく、初歩的な段階である。新書などの入門書を読み慣れるためのオリジナルな授業プログラムを「あらし読み」と筆者は命名し、2013年度から1000名を越える学生と授業やワークショップを行ってきた。

本来、大学での学びは、簡単には読めない専門書を読み考えるという大きな目標があるが、不読者である大学生がその域に一気に到達することはできない。そこで、入門書から順番に読んでいく「準備読書」の段階を提唱するものである。学生一人ひとりが「準備読書」で、さまざまな知性の軸を探し、その後、軸を広げつつ深めていくことを構想している。

「読書することは編集すること」という松岡正剛(2009)にも、「本は二度読む」、「たまには違ったものを食べてみる」、「文系も理系もこだわらない」、「雑誌が読めれば本は読める」、「対角線の編集読書」、「目次をしっかりと読む」、「構造的な読書」、「速読にとらわれるのがダメ」など、自由で広がりを求める読書方法が矢継ぎ早に出てくる。本を読むために読むのではなく、学生自らが頭を柔軟に使う読み方があることを示している。編集する思考のもととして、頭の使い方に相応しい読み方があることが学べる。

「あらし読み」で「準備読書」をくぐり抜けた学生は、つぎのもっと深い、自由な読みにつながるはずである。

2.2 「読む」を軸に「書く」・「描く」・「話す」・「聴く」 (active reading)

小学生から高校生の段階では、「たくさん本を読もう」、「読書感想文を書こう」、「ビブリオバトルをしよう」「レポートを書こう」など、通読後に課題や活動を課してきた。しかし、大学生が「通読」しか使えず挫折している姿をみると、読んでいる途中での読書指導が必要になる。そこで、読みながら書く・描く・話す・聴く活動を取り込むという新しい読みの技術を使ったプログラムを設計した。

プログラム設計の際、参考にしたのは、英語の多読用読み物 Graded Readers のなかに掲載されていた小課題である。ノンフィクションの分野の課題だけを16

冊抽出し、分析を行った(牧, 2019a)。英語の多読用テキストを読む場合、1冊すべて通読してから課題が挙げられるのではなく、“before reading”・“during reading”・“after reading”の3か所に、読み進めるための数問の課題が挟まれている。しかも、その課題は「書く」・「話す」・「聴く」という言語領域にもおよぶ。読みを推進するために内容を確認する「解説」の問いだけでなく、内容に関しての読み手の体験、既知情報を引き出すこと、これからの予測などの「参加」という角度、引用という「使用」という角度を通してレポートを書く、批評的にテキストを読み「分析」という角度からの課題が提示されていることが明らかになった。「参加」「使用」「分析」という角度は、日本の読解で「文章の中の語の意味や主旨を問う」という「解説」を越えた問いになっている。こうした英語多読の視点を組み合わせ、2016年度にはオリジナルな「あらまし読みシート」を改編した。

2.3 「俯瞰的な読み」で複数冊読む (perspective reading)

「あらまし読み」のプログラムは、「あらまし読みシート」を軸に、本を外側から読んでいく。これは、石黒圭(2010)の「話題ストラテジー」・「取捨選択ストラテジー」を実際の読書プログラムに具体化したものである。

石黒圭(2010)による8つの読みのストラテジーから、「速読」という言葉に留意したい。「速読」は、学生にとって魅力的な言葉らしく効率的に読みたいと願っている声が届くことが多い。学生の理解している「速読」は、「画像取得」や「文字認識」を素早く行えるように鍛える眼球運動の活動を指すことが多い。しかし、石黒の「速読」のなかの「話題ストラテジー」や「取捨選択ストラテジー」は、読み手の知識と体験を内容へ結び付けることから速く読める方法である。人間が自然に行っていることではあるが、知識や体験が増えるにつれて、一層速くわかる状態になる「速読」なのである。

石黒のいう「速読」には、「知識で理解を加速する力」である「話題ストラテジー」と「要点を的確に見抜く力」である「取捨選択ストラテジー」がある。両者とも「大意把握を目的とする速読であるスキミングをみがく」方略である。「話題ストラテジー」のポイントは、既知情報に引きつけて理解すること、タイトルや書き出しに目を留め、目次を見て本の展開を想像することである。ここから、「あらまし読みシート」に「題名読み」、「目次読み」や「序章読み」を取り入れた。つぎに、「興味ある章」を読み、最後に、読んだことの全体を振り返る活動をして、1冊全体の著者の見方の「あらまし」をつかむ読み方を経験する。60分程度の集中力で読み切る緊張感やスポーツで汗した後のような爽やかさを感じるという。ここで、本の内容を俯瞰し、つぎの行動を決めていく。もうこの本と別れて別の本へいく者、同じ1冊の別の章へいく者、通読してしまう者、長期休みにもう一度読みたいという者などさまざまである。人と人が出会うように、本と出会って

いく機会は多様である。「準備読書」で読む力と習慣をつけた学生がつぎの専門書へと進むのである。

2.4 「あらし読み」の繰り返しと「レポート」

「あらし読み」を繰り返し、「レポート」にいたる一連の流れを「あらしメソッド」と名づけて、活動の全体とした。筆者は、読書教育プログラム全体を俯瞰的にとらえる際に「あらしメソッド」という用語を使うことにしている。

「第1段階：本を自分で選ぶ」に始まり、「第2段階：あらし読みをする（俯瞰的複数冊読み）」、「第3段階：レポートを書く」という3段階活動を指している。本稿の題名にある「俯瞰的読みと比較レポート作成」は、第2段階、第3段階を示している。

第1段の選書のところは、「リザーブブック制」、「ブックリスト制」、「テーマ内自由選択制」、「制限なし自由選択制」、「クラスで3冊を読む」、「1冊限定」などを、筆者は過去に実践してきており、学校や教室に応じて、さまざまな形で運用できる。そして、「あらしメソッド」は、必ずレポート、プレゼンテーションなどのアウトプット活動に向かうことを条件としている。「あらしメソッド」は、「1冊だけを単独に読むことだけの活動」にしてはならない。系統的につながったテーマの本を最低3冊は読んでみて、併読しながら多様な知性の拡大に進むことを意図している。

第2段階については、前述したように、60分程度で1冊をざっと読み、つかんでいく「あらし読み」の技術を習慣にする段階である。筆者は、1冊の本を俯瞰的にみるとき「あらし読み」という用語を使うことにしている。

第3段階は、アウトプットする一つの事例として「比較レポート」を書かせた。「比較」は、論理力の基本の一つである。この「比較」を契機に、学生が考え始めてほしいという期待で仕掛けた教育的土台である。(牧, 2014) 複数冊のあらし読みを終えた本から2冊を選び、レポートの結論章に、2冊の共通点や相違点を記入させ、その後自分の見方を加えた考察を記述させるというレポート構成を計画した。書く対象の2冊の選択は学生に任せ、「レポートの誘導文」によって「レポートの型」を与えて方向づけている。この「比較」は自由な発想や俯瞰性のある見方ができないとかなり難しい活動であり、2冊の「併読」レポートのレベルに留まっていることが多いのが実態である。最低限の2冊(2者)以上の見方を取り込むためのベクトル設定については、今後検討していきたい。

3 「学習者の気づき」に関する計量テキスト分析

3.1 分析の目的

本実践をこの8年間継続し続けてきた力のもと「学習者の声」であった。筆者は、教員として「本の多様な読みの技術を理論的に教える立場」というよりも、

学生たちの声を聴きながら「どうしたら読み手として関心のある内容をつかめるのか」ということを問い続けてきた。

本来、本実践の方法論の有効性を問うためには、学生から産出されたレポートの検証(牧, 2018・2019b)と学生の「気づき」の質的・量的な両面から検討することが必要となる。

本稿では、いくつかの検証のなかから、学生の書いた「振り返り文」を通して、学習者の学びへの「気づき」を取り上げ、計量テキスト分析を行った。

なお、自由記述文である「振り返り文」の分析には、樋口耕一(2004, 2014)が提唱する計量テキスト分析の一手法である「接合アプローチ」に従う。接合アプローチとは、テキストデータを2段階に分け分析する手法である。接合アプローチの第1段階は、多変量解析を用いることで、分析者のもつ理論や問題意識の影響を極力受けない形でデータを要約・提示する。この段階を踏むことで、分析者の理論や仮説にとって都合のよい分析がされてしまうことを防ぐことができる。つぎに、接合アプローチの第2段階は、コーディングルールを作成することで、明示的に理論仮説の検証や問題意識の追求を行う。その際、第1段階で示された多変量解析による客観的なデータから、どの部分、あるいはどの側面がコーディングルールによって取り上げられたのかを示すことができれば、恣意的になりがちな分析方法を第三者が把握できるようになる。つまりは、分析の信頼性・客観性を向上させることができる。

本研究においては、接合アプローチの第1段階として、多変量解析の分析手法である共起ネットワーク分析を用いる。共起ネットワーク分析を行うことで、出現パターンの似通った語の組み合わせにどのようなものがあったのかを探索することができる。つまり、本実践の振り返り文がどういった気づきの概念で構成されているのかを明示することができる。

また、分析の第2段階としては、第1段階で得られた気づきの概念をもとにコーディングルールを作成した上で、振り返り文における気づきの概念の出現率が「振り返り文(レポート)の提出時期」で差が生じるかについて、カイ二乗検定を用いて検討する。この分析を行うことで、「振り返り文の提出時期」により、気づきの概念に差が生じるか否かについて明らかにすることを目的とする。

3.2 分析の方法

(1) 調査対象と期間

X大学教育学部において「初年次演習」を履修した1年生(75人)を調査対象とした。本調査は2016年8月、および2017年6月と8月に実施した。有効回答者は59人であった。内訳は2016年度29人、2017年度30人であった。

(2) 調査方法

「初年次演習」半期授業中、「俯瞰的多読と比較レポート」を実施し、中間振り返り文と最終振り返り文を提出させた。その際の振り返り文への教示文は、「『あらまし読み』を複数冊行うことと『比較レポート』を書くことで、どのような態度や行動を取れるようになりましたか、どのような気づきがありましたか、自由記述してください。」である。この教示文から「あらまし読み」や「比較レポート」を通しての新たな気づきを抽出できるように配慮した。

(3) 使用ツール

計量テキスト分析には、樋口（2014）が開発したKHCoder Version 3.Alpha.13aを用いた。また、形態素解析エンジンにはMecab Version 0.996を用いた。

3.3 結果

3.3.1 接合アプローチ第一段階の結果

(1) 振り返り文の語数

対象となる振り返り文の総抽出語数（分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数）は16,219語、異なり語数（何種類の語が含まれているかを示す数）は1,281語であった。

(2) 振り返り文で言及された気づきの概念

振り返り文（ $N=59$ ）を分析対象として、振り返り文がどのような気づきの概念で構成されているのかを明らかにするため、共起ネットワーク分析を行った（図1）。その際、語同士の共起関係の算出にはJaccard法を採用した。また、出現回数が極端に少ない語、ならびに本授業の振り返り文に必然的に多く出現する語（例えば、「本」「読む」「レポート」など）を排除するために、語単語の最小出現数を10、最大出現数を100とした。

結果の共起ネットワーク図1は、共起関係の強い語同士だけが線で繋がっているため、これらのコミュニティは気づきの概念として捉えることができる。そのため、以下に個々のコミュニティについて概観する。なお、「コミュニティ」という用語は、樋口に倣っているが、「共起関係にあるグループ」の意味である。また、以下の説明のコミュニティの順序に有意性はない。

第1コミュニティは「時間」「短い」、第2コミュニティは「有効」「速読」などの抽出語で構成されていた。そこで、これらの抽出語が、振り返り文においてどのような文脈で使用されていたかを確認するため、Keyword In Context（以下、KWIC）分析を行ったところ、「短い時間で効率的に本を読むとしたらこの方法が有効だと考える」などの文脈で用いられていた。そのため、これらのコミュニ

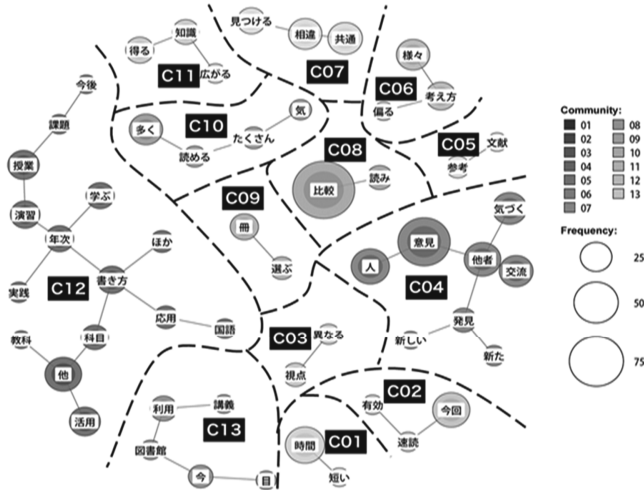


図1 共起ネットワーク分析結果

ティは「短時間で読むことができる」に関する気づきの概念と見て取れる。

第3コミュニティは「異なる」「視点」、第4コミュニティは「他者」「発見」などの抽出語で構成されており、「ほかの人の感想・意見を知ることによって新しい発見もあるように思った」などの文脈で用いられていた。そのため、これらのコミュニティは「異なる視点を発見できる」に関する気づきの概念と見て取れる。

第5コミュニティは「参考」「文献」の抽出語で構成されており、「レポートなどの参考文献・論文などを読むときにあらまし読みを活用したい」などの文脈で用いられていた。そのため、このコミュニティは「参考文献の選定に活用できる」に関する気づきの概念と見て取れる。

第6コミュニティは「考え方」「偏る」「様々」で構成されており、「比較する対象を見つけることができるようになって、偏った考え方になることを防ぐことにもつながると考えた」などの文脈で用いられていた。そのため、このコミュニティは「考え方の偏りを防ぐことができる」に関する気づきの概念と見て取れる。

第7コミュニティは「共通」「相違」「見つける」、第8コミュニティは「比較」「読み」、第9コミュニティは「選ぶ」「冊」の抽出語で構成されており、「2冊の共通点や相違点が見えてくるので、知りたいことをより深く理解できるようになる」などの文脈で用いられていた。そのため、これらのコミュニティは「共通点・相違点を比較できる」に関する気づきの概念と見て取れる。

第10コミュニティは「たくさん」「多く」「読める」で構成されており、「多くの本が読めるようになるのだと感じる」などの文脈で用いられていた。そのため、

このコミュニティは「たくさん読むことができる」に関する気づきの概念と見て取れる。

第11コミュニティは「知識」「広がる」などで構成されており、「様々な考え方に触れることができるので、自分の知識や価値観が広がると思う」などの文脈で用いられていた。そのため、このコミュニティは「知識を広げることができる」に関する気づきの概念と見て取れる。

第12コミュニティは「他」「教科」「科目」「活用」「応用」などの抽出語で構成されており、「他教科に初年期演習でやったことが効率よく活用することができる」などの文脈で用いられていた。そのため、このコミュニティは「他の科目に活用できる」に関する気づきの概念と見て取れる。

第13コミュニティは「図書館」「利用」などの抽出語で構成されており、「図書館利用も『読む』ことについて考え始めてから利用頻度が上がりました」などの文脈で用いられていた。そのため、このコミュニティは「図書館の利用がうまくなる」に関する気づきの概念と見て取れる。

(3) 気づきの概念のグループ化

前節で明らかになった振り返り文に含まれる気づきの概念を概観すると、「短時間で読むことができる」、「たくさん読むことができる」のような、授業中に新たな読み方「あらし読み」を実践した結果、直観的に気づける概念があった。一方で、「考え方の偏りを防ぐことができる」、「他の科目に活用できる」のような、あらし読みのスキルと考え方を理解した上で、発展させ応用することで初めて気づける概念もあった。

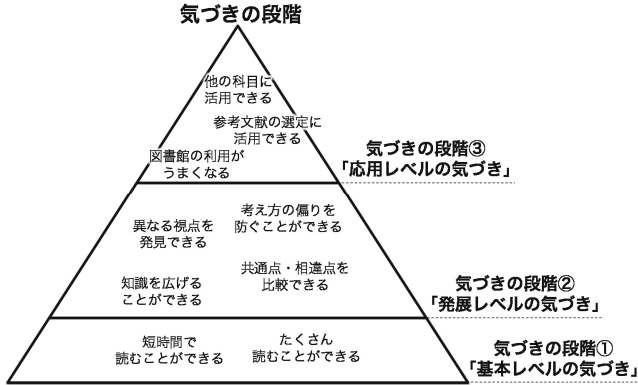
これらの気づきの概念は図2のように「基本レベル」・「発展レベル」・「応用レベル」の3つの「気づきの段階」にグループ化できると考えられる。そのため、以後の分析には、これらの「気づきの段階」も対象に加えた。

3.3.2 接合アプローチ第二段階の結果

(1) 気づきの概念および気づきの段階のコード化

振り返り文から抽出した気づきの概念が他の属性による違いがあるかを検証するため、コーディングルールを作成した。コーディングとは、たとえば「『情報』と『探す』の2語が近くに出現していれば、その文章に『調べ物』というコードを与えること」といったコーディングルールを作成し、そのルールに沿ってそれぞれの文章にコードを付与していく作業である。この作業を行うことで、「調べ物」というコードが付与された文章、すなわち「調べ物」という主題に言及した文章の数・割合を調べることができる（樋口，2011）。

本研究におけるコーディングルールは、振り返り文における、気づきの概念9



概念とそれを集約した気づきの段階 3 段階を対象に作成した。また、コーディングルールの内容は、その気づきの概念を抽出するに相応しい抽出語の指定を行うものである (表 1)。

(2) 振り返り文の提出時期による比較

表 1 で示したコーディングルールを用いて、「気づきの概念」9 概念と「気づきの段階」3 段階が、レポート提出時期において差があるかを検討するため、 χ^2 検定を用いて分析を行った (図 3)。

その結果、気づきの概念「短時間で読むことができる」は、中間レポートよりも最終レポートで有意に多く言及されていた ($\chi^2 (2) = 4.541, p < .05$)。その一方で、「短時間で読むことができる」以外の気づきの概念は、レポート提出時点での違いは見られなかった。

気づきの段階「基本レベルの気づき」および「応用レベルの気づき」に関しては、中間レポートよりも最終レポートで有意に多く言及されていた ($\chi^2 (2) = 3.866, p < .05$; $\chi^2 (2) = 3.866, p < .05$)。その一方で、「発展レベルの気づき」は、レポート提出時点での違いは見られなかった。

4 計量テキスト分析からの考察

本実践の目標である「読みのハードルを下げること」、「アクティブ・リーディングに参加すること」、「俯瞰的な読みで複数冊読むこと」について、分析の結果を踏まえて考察していく。

学習者の振り返り文の計量テキスト分析から「3 段階 9 つの気づき」が明らかになったことで、一貫した方向性が得られた。それは、学生の「9 つの気づき」

表1 分析に使用したコーディングルール

ID	コード	コーディングルール
1	短時間で読むことができる	(短い and 時間) or 短時間 or (時間 and 短縮) or 速読
2	たくさん読むことができる	seq(たくさん-読める)[b5] or seq(たくさん-読む)[b5] or seq(たくさん-読める)[b5] or seq(たくさん-読む)[b5] or 多読
3	知識を広げることができる	seq(知識-広がる)[0] or seq(知識-得る)[0]
4	異なる視点を発見できる	(他者 and 発見) or (他者 and 気づく) or (異なる and 視点) or (違う and 視点) or (様々な and 視点)
5	共通点・相違点を比較できる	(共通 and 見つける) or (相違 and 見つける) or (比較 and 読み) or (冊 and 選ぶ)
6	考え方の偏りを防ぐことができる	(考え方 and 偏る) or (様々 and 考え方)
7	参考文献の選定に活用できる	文献 or 引用 or 書籍
8	図書館の利用がうまくなる	図書館 and 活用
9	他の科目に活用できる	(科目 and 活用) or (科目 and 応用) or (教科 and 活用) or (教科 and 応用) or (他 and 科目)
10	気づきの段階1	<*短時間で読むことができる> or <*たくさん読むことができる>
11	気づきの段階2	<*知識を広げることができる> or <*異なる視点を発見できる> or <*共通点・相違点を比較できる> or <*考え方の偏りを防ぐことができる>
12	気づきの段階3	<*図書館の利用がうまくなる> or <*参考文献の選定に活用できる> or <*他の科目に活用できる>

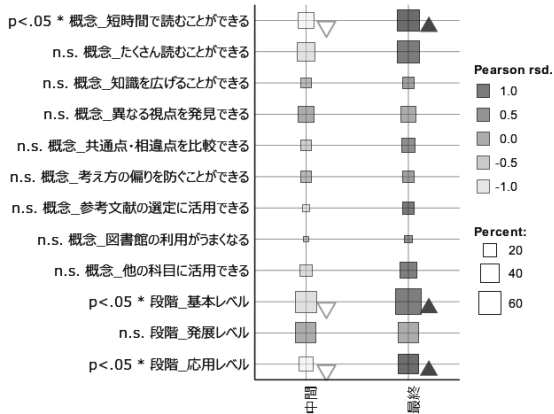


図3 気づきの概念・気づきの段階とレポート提出時期との関係

が目標であった「読むことと考えることの結びつき」につながったことである。

基本レベルでは、学生は「短時間で読むことができる」、「たくさん読むことができる」という短時間で本の要点がつかめることを知った。ここから、「読みのハードル」が下がり、読むということは、時間をかけて本のすべてを「通読」するだけではないことに気づいた。言い換えると、多様な著者の本の要点を比べる下地ができてきたことになる。「あらまし読み」が有効であり、短い時間の俯瞰的な読みからも情報が獲得できることを検証することができた。

発展レベルでは、複数冊のあらまし読みから比較レポートに向かって、「知識を広げることができる」、「異なる視点を発見できる」、「共通点・相違点を比較で

きる]、「考え方の偏りを防ぐことができる」という声から、学生の本へのまなざしが変わった。この気づきにいたることは容易なことではないが、学生自身が著者に振り回されず、主体となって、複数の本と向かい合う読み方の意味を発見したことになる。向かい合う複数の著者(テキスト)と対話しつつ、学生は、そこでこそ考え始めるのである。その裏側で、学生は自ずと「本は全部読まなくてもわかることがある」という読みの技術を獲得することにもなっている。

応用レベルでは、「図書館の利用がうまくなる」、「参考文献の選定に活用できる」、「他の科目に活用できる」という、「あらし読み」を応用して、つぎへの行動へとつながったことが明らかになった。

このように、「複数冊を並行して揃い読む『あらし読み』の基本から、「比較視点を持つ」という発展、「他科目への活用」という応用段階という「気づきの3段階」へとつながった。

しかし、こうした学生の気づきに表れてこなかった側面がある。それは、「書く」「話す」「聴く」ことや対話を通しての深化、自己成長についての気づきが少なかった点である。例えば、「短い話を集中して聴ける」、「メモを取ると後で思い出せる」、「同じ話を3回すると、次第に内容が自分の理解になっていく」、「他者の見方を知ることができる」、「読み手のなかでの自動化が起こる」、「非認知能力が高まる」、「対話を短く交わすことで、ラポールの関係が生まれる」などである。こうした気づきは、2年生以上の学生、高大の教員や図書館司書などから聞こえてくる声である。大学に入ってきたばかりの1年生のメタ認知能力を引き出すためには、こうした学生が自覚化しにくいところを、教員から学生へ「なぜかという問い」で渡していくことが重要である。「なぜ1分間で話すのか」、「なぜマップでメモを描くのか」、「なぜ本をあらしみだけで読むのか」という理由を大学1年生に問いかけていくことから、学びの姿勢そのものをメタ認知させる教育の重要性が明らかになった。

接合アプローチ第二段階(2) 振り返り文の提出時期による比較について補足する。最終レポートでは、より時間的な制約のある中で、効率よく読めることが指摘されていた。さらに、「基本レベルの気づき」、「応用レベルの気づき」が最終レポートで多く言及されたことは、「あらし読み」の方法を活用し、考えてレポートを書こうとしていることを検証できるものであった。

以上、本稿の計量テキスト分析から、2点を整理しておきたい。第1は、「俯瞰的な読みの技術」のプログラムによって、学生と本とが新たな形につながり、レポートを書くという学びに結びつく可能性が高いことである。第2は、読むプロセスを、学生がメタ認知できるような支援を行うことで、「初年次教育」の根底にある学びへの姿勢や習慣を促すことになる点である。

今回の調査では、調査対象数も少なく、計量テキスト分析としての結果はじゅ

うぶんなものとは言えない。さらに、「あらましメソッド」への質的分析や作成されたレポートの調査方法の基準を設定することも、今後の大きな課題である。

【 謝意 】

・「あらましメソッド ONLINE」(ワークショップ)は、2020年11月「図書館総合展」に出展し、日本各地の学生・院生・高大教員・高大や地域の図書館司書・出版社・企業から延べ64名の参加者を迎えた。この出展を機に、学生だけでなく多様な立場からの視点で、本メソッドを考える方向に切り替えることができた。ここで、参加者の皆様に深く感謝の意を表したい。

【 注 】

- ・本稿は、2018年日本読書学会研究大会の発表要項をもとにしている。本稿の研究にあたっては、周景龍・中村康則(株式会社 SCREEN AS アドバンスドシステムソリューションズ)の協力を得ていることをことわっておきたい。
- ・本実践「大学生の学びの基本『読む技術』を鍛える方法—あらましメソッド Hybrid—」は、2020年11月9日に、大学ICT推進協議会から「大学における New Normal 時代の教育・研究を考えていく上で大変参考になる事例であり、広く共有されることが望ましい事例」として審査認定された。同年12月9日大学ICT推進協議会 AXIES 年次大会教育技術開発部企画セッションにて招待を受け、口頭発表の機会を得た。

【 参考文献 】

- 樋口耕一 (2004) 「テキスト型データの計量的分析：2つのアプローチの峻別と統合」『理論と方法』19 (1) : 101-115.
- 樋口耕一 (2011) 「現代における全国紙の内容分析の有効性：社会意識の探索はどこまで可能か」『行動計量学』38 (1) : 1-12.
- 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版.
- 石黒圭 (2010) 『「読む」技術』光文社新書.
- 牧恵子 (2014) 『学生のための学び入門(ヒト・テキストとの対話からはじめよう)』ナカニシヤ出版.
- 牧恵子 (2017) 「『レポートを書くこと』と『読むこと』の再定位：大学初年次生の困難さから」, 愛知教育大学大学院『国語研究』25 : 35-60.
- 牧恵子 (2018) 「『俯瞰的多読と比較レポート』の実践：2016年度『初年次演習』の産出文章からの検証」, 愛知教育大学大学院『国語研究』26 : 25-34.
- 牧恵子 (2019a) 「英語多読方法の調査と日本語多読への応用—大学初年次教育に

- おける新たな「読書シート」の開発のために―], 愛知教育大学大学院『国語研究』27: 29-48.
- 牧恵子 (2019b) 「大学初年次教育におけるレポート指導のための『俯瞰的多読教育』の可能性」, 日本読書学会, 『読書科学』239: 1-11.
- 松岡正剛 (2009) 『多読術』ちくまプリマー新書.
- 東京大学大学院教育学研究科 大学経営・政策研究センター (CRUMP), 第2回全国大学生調査 (2018) <http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/cat77/cat82/> (2021. 1. 26 閲覧)
- 東谷護編著, 石黒圭, ジェームス・ドーシー, 安部達雄, 飯間浩明, 谷美奈, 師玉真理, 下平尾直 (2019) 『表現と教養: スキル重視ではない初年次教育の探究』ナカニシヤ出版.
- 全国学校図書館協議会, 第65回学校読書調査 (2019年) <https://www.j-sla.or.jp/material/research/dokusyotyousa.html> (2021. 1. 26. 閲覧)

(まき・けいこ 昭和62年本学修士課程修了 令和2年度本学非常勤講師)